

校地選定の結果報告

高校再編推進室

懇話会で示された検討項目について、部会の意見を踏まえ、下記のとおり検討した。

1 校地・校舎に係る環境

検討項目(○) 部会での考え方(◇)	検討結果
○敷地(校地)の広さ ◇充実した施設を整備するには、敷地面積が広い校地が必要だと考える。	○校舎と一体となっている敷地(校地)面積は、伊那北高校が40,335㎡、伊那弥生ケ丘高校が32,615㎡である。日常的な教育活動やゆとりある環境整備を考えると、より広い校地の方が利活用しやすく、伊那北高校に優位性があると考えられる。 ○両校とも土砂災害・洪水災害における危険地域ではないことを伊那市危機管理課に確認を得ている。
○学校へのアクセス ◇学校へのアクセスも考慮したほうがよいと考える。	○学校へのアクセスは周辺道路の整備状況によるところが大きく、両校ともに比較的広い接続道路があることから、大きな差はないと考えられる。 ○伊那弥生ケ丘高校は小黒川スマートIC近くに位置し、高速道路利用時のアクセスは良いものの、目的地までの総移動時間に大きな差はないと考えられる。
○近隣住民への影響 ◇学校での活動による騒音やほこり等、近隣住民への影響が少ない校地がよいと考える。	○両校の学校活動に対しては、近隣から砂ぼこりや騒音等に関する苦情が寄せられる状況にはなく、特別に考慮すべき差異は生じていないものと考えられる。
○部活動の活動場所の確保 ◇部活動等の活動場所が確保できる校地が必要だと考える。	○部活動の活動場所としては、第2グラウンドを有する伊那弥生ケ丘高校に優位性があると考えられる。 ○伊那弥生ケ丘高校第2グラウンドは、伊那市ウエストスポーツパークと隣接しており、部活動等の活動場所としての有益性は高いと考えられる。
○駐車場施設の確保 ◇学校行事等で大勢の方が来校する際、駐車場の確保ができる校地が必要だと考える。	○近くの春日公園の駐車場が利用できる伊那弥生ケ丘高校は、大勢が来校する時の利便性は高いと考えられるが、伊那北高校では、来客者は校地内に多く駐車でき、伊那北高校は、平常時の利便性は高いと考えられることから、両校に大きな差があるとはいえないと考えられる。

2 通学環境

検討項目(○) 部会での考え方(◇)	検討結果
○駅からの距離 ◇上伊那各地から集まることを想定し、駅から近い場所に校地がある方がよいと考える。	○両校の最寄り駅である「伊那北駅」と「伊那市駅」は、両駅とも通学上の利便性に差は生じていない。 ○両校とも最寄り駅から徒歩7～13分程度であり、最寄り駅からの通学時間に大きな差はないと考えられる。
○通学時の安全性 ◇駅から学校間の通学時の安全が確保できる校地の方がよいと考える。	○両校とも、通学に利用する交通量の多い道路に歩道が設置されており、通学上の安全性は差がないものと考えられる。

3 学習活動を支える教育環境

検討項目(○) 部会での考え方(◇)	検討結果
○他の学校との交流の利便性 ◇他の学校との連携や交流がしやすい校地が必要だと考える。	○他の学校との交流活動における移動距離を比較すると、大学や短期大学校には伊那北高校の方が若干近く、幼保・小中学校には総じて伊那弥生ケ丘高校の方が近い。実際にどの学校と交流するかで一長一短あるため、 両校に大きな差はないと考えられる。
○地域との交流の利便性 ◇地域の施設や企業との連携、交流を想定し、生徒が移動しやすい校地が必要だと考える。	○地域の施設や企業との連携活動における移動距離を比較する上で、様々な連携先が想定され全ては網羅できない。一例をあげると市役所には伊那弥生ケ丘高校が近く、伊那中央病院には伊那北高校が近い。実際にどの施設・企業と交流するかで一長一短あるため、 両校に大きな差はないと考えられる。
○周辺の学習環境(自学、自習スペース) ◇放課後の学習のための自習スペース等へ、生徒が移動しやすい校地が必要だと考える。	○放課後の学習スペースとして利用できるいなっせや図書館等の施設には、 伊那弥生ケ丘高校が近く優位性があると考えられる。 一方、施設利用者には伊那北高校の生徒も多く、放課後の利用は 学校からの距離だけでなく自宅の位置等も関連するものと推察される。
○隣接施設(公共施設等)の有用性 ◇学校外の施設での活動を想定し、近隣の施設が使いやすい校地が必要だと考える。	○県伊那文化会館等の施設とは、伊那弥生ケ丘高校の方が近く、利便性があると考えられるが、学校の日常的利用には限度もあり、学校行事の利用頻度は、両校とも同程度の利用状況となっていることから、 両校に大きな差はないと考えられる。

4 総括

各検討項目について、伊那北高校と伊那弥生ケ丘高校の校地の比較検討を行った。

伊那北高校に優位性があると考えられる項目は、「敷地(校地)の広さ」であり、伊那弥生ケ丘高校に優位性があると考えられる項目は「部活動の活動場所の確保」と「周辺の学習環境(自学、自習スペース)」であり、その他の項目は大きな差が生じている状況ではないことから、どちらかに明らかな優位性があるとはいえないものと判断できる。

このため、**それぞれの優位性について考察しつつ、新校の校地を選定する必要がある。**

「敷地(校地)の広さ」は、「生徒の日常的な教育活動の充実」、「部活動の活動場所の確保」は、「生徒の多様な部活動の充実」、「周辺の学習環境(自学、自習スペース)」は、「課外における主体的な活動の充実」に繋がるものであり、それぞれ異なる活動に対する優位性であると認識できる。

こうした状況を踏まえ、**新校の校地を選定する上で最優先すべき項目としては、全校生徒がその優位性を享受できる「日常行われる教育活動の充実」につながる「敷地(校地)の広さ」を最優先すべきとの結論に至り、下記のように判断したい。**

また、校地検討部会からは、早期に開校し新たな学びを実現するための新たな施設・設備の導入要望も出されており、学習空間デザインの実現や充実した学習環境づくりにおいても、広くゆとりのある敷地(校地)の活用が望ましいものとする。

さらに、伊那弥生ケ丘高校の第2グラウンドについては、生徒の多彩な部活動を支えるために、新校においても活用していくこととしたい。現状と比べ移動距離や時間が長くなるが、伊那北高校の生徒が伊那市ウェストスポーツパークを利用している状況に鑑み、活用可能と判断した。

○伊那新校(仮称)は、伊那北高校の校地校舎を活用するとともに、伊那弥生ケ丘高校の第2グラウンドも有効に活用するものとする。